
せっかくバーサーカーに憑依したんだから雁夜おじさん助けちゃおうぜ！

主

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

せつかくバーサーカーに憑依したんだから雁夜おじさん助けちゃ
おひげ！

【ZINEID】

N7068Y

【作者名】

主

【あらすじ】

Fate/ZEROの雁夜おじさんがあまりに氣の毒！虚淵さん、
アンタって人はー！

そんなことを考えつつ眠りについた男は、気がついたら第四次聖杯
戦争のバーサーカーになっていた！

「ああ、きつとこれは夢だな。夢なら好き勝手にしてやるわ。雁夜
おじさんが幸せになるエンディングへと導くのだ！－」

原作知識を生かしつつ、雁夜おじさんのために奮闘する挙動不審な
バーサーカー。これは彼の夢の物語。

0・0 シリアスプレイヤーに、俺はなる！（前書き）

小説家になろうに挑戦してみたかった。後悔はしていない。
アイディア勝負なので文章力やストーリーには期待しないほうがいいかもしれない。もちろんシリアスでもなんでもない。

〇・〇 シリアスブレイカーに、俺はなる！

土雁夜おじさんサイドキ

その夜、間桐家の地下にある蟲巣にて、間桐雁夜はバーサーカーを召喚した。

生まれつきの素養はあつても魔術の研鑽をほとんどまったく積んでいない雁夜はその肉体に寄生させたおぞましい蟲たちによって魔術師の体裁をとつてはいるが、それでも他のマスターに比べれば足元にも及ばない。従つて、サー・ヴァントは狂化によつてパラメーターのランクアップを行わざるを得なくなり、必然的にバーサーカーを選ぶこととなつた。雁夜の文字通り寿命を削つた召喚魔術の呼びかけに応え、吐血に塗れた魔方陣から闇の炎を巻きあげて漆黒のフルプレートを装着した大男が姿を表す。その刺さるような禍々しい氣迫はまさに狂戦士バーサーカーのものだつた。

「や、やつた……！成功した……！」

息絶える寸前まで生命力を失つた雁夜が、地べたに頬を擦りつけながら亀裂のような笑みを刻む。その様子を後ろから満足そうに眺めるのは、間桐家の初代にして歪みきつた人格を持つ老人、間桐臓硯だ。

そつ、そこまでは彼らの計画通りであつた。

計画から外れたのは、バーサーカーが突如としてその双腕を大上段に振りかぶり、一撃を持つて臓硯を亡き者にしたところからであつた。

「バーサーカー、何を

！？」

「「うあやあああああ！－！」

いかに数百年の時を生きた真性の化け物でも、人間より遙か高みに達した英靈の一撃を堪えることは出来なかつた。苦痛と汚辱に塗れた雁夜の姿に愉悦を覚えていた臓硯は、不意を衝いて放たれた恐るべき大破壊力に一瞬とて持ちこたえることなく、醜い悲鳴を上げながら血肉と臓物に為り果てた。音速を軽々と突破した拳は辛うじて消滅を免れた蟲すら散り散りに粉碎し、もはやそれらが臓硯だつたことすら判別することはできない。

バーサーカーによる暴走は臓硯を殺すのみにとどまつたが、それがもたらした惨状は地下室の崩壊に繋がるほどのものだつた。余波を受けて大きく抉れた柱は天井を支えられなくなり、ゴゴゴと重苦しい音を立てながら次々と大きな亀裂を浮かばせる。

「桜が……！」

ガラガラと崩れ行く地下室の床に爪を立て、雁夜が必死に蠢く。なぜバーサーカーが突然臓硯を殺したのかなど、どうでもいいことだつた。もはや臓硯が死んだ今、聖杯戦争のような狂つたゲームに参加する意味はなくなつた。しかし、この蟲藏には桜がいる。救い出してやると誓つた愛する女性の娘が今も蟲どもに囚われ、犯され、精神を食いつくされようとしている。例え自分が死んだとしても、せめて彼女だけは助けてやらなければならない。

（くそつ、動け！今だけは動いてくれ！頼む……！）

必死に歯噛みして前に前に這い進もうとしているのに、呪喚によつて現界以上に体力も魔力も使い果たした雁夜の肉体は主の言うことを聞かない。ピクピクと痙攣するだけの己の四肢を明滅する視界に入れて、雁夜の視界が涙で歪む。自分のあまりに惨めな最期と、救われることのなかつた少女への悔恨を悲観しての血涙だった。

「こんな、こんな結末なんて

うぐう…？」

ついに諦め、力尽きようとした雁夜の首根っこを何者かがひょいと掴み上げた。その怪力の持ち主は雁夜を軽々と肩に担ぎ、大股で壁に向かつて歩き出す。堅牢で冷たい鎧の感触を腹に感じる。

「ば、バーサーカー！？」

それはつい先ほど雁夜が召喚したサーヴァント、バーサーカーであつた。彼は何を思ったのか、進行方向にあつた見るからに厚い地下の壁を無造作に蹴破る。豆腐のように易々と破壊された壁の穴からわらわらと醜悪な姿形をした蟲がこぼれ落ちてくる。見ているだけでも胸糞が悪くなる蟲の滝にバーサーカーがズボリと手を突つ込み、何かを探すように上下左右に行つたり来たりする。呆然とバーサーカーの奇行を見る雁夜の目に、藍色の何かが映つた。蟲の海の中に沈んでいるソレは、自分が救おうとした幼い命。

「バーサーカー、そこだーそここいるー」

バーサーカーが捜しているモノと自分が指さす者が同じである保証はなかつたが、霞みゆく雁夜の思考ではそこまで至ることは出来なかつた。だが幸運にも、その一つは見事に一致していた。

バーサーカーは雁夜が指さした箇所に手をやると、蟲の中から小柄な裸の少女をそつと掬い上げる。それは、間桐の魔術に無理やり染め変えられたせいで髪色も瞳の色も変わってしまった間桐桜だった。苛烈で非情な魔術処置によつて精神は崩壊寸前だが、生きようと必死に息をする瞳は未だ生者らしさを垣間見せている。

(ああ、よかつた)

その小さな裸体は蟲によつて傷だらけになつてはいるが、死に至るほどのものは見つけられない。治療を施せば桜は生きられる。臓覗

が死んだ今、自由に、普通の少女としての人生を歩むことも出来る。

「ば、バーサーカー。頼む、桜を、どうか、生かして、くれ」

もう田も見えない。崩壊する地下の振動も轟音も届かない。事切れ
る寸前の雁夜は、しかし最期の力を振り絞つて己のサーヴァントに
懇願する。ついに意識が途切れる最中、

「おく」

という意味不明な返答が聞こえた気がした……。

†バーサーカーサイド†

Fate/ZEROで一番可哀想なのは雁夜おじさんだと思つ。 1
0人中10人はそう思つてるに違ひない。

俺はたつた今読み終わった小説を本棚に仕舞いつつ、その本の登場
人物の一人、間桐雁夜に思いを馳せていた。彼ほどまでに必死の思
いで聖杯戦争に参加して、血反吐を吐いて戦い尽くし、望まぬ最期
を遂げた男はいないだろう。虚淵さんマジ鬼畜。

「んお、もうこんな時間か」

夢中になつて読んでいたせいでもう深夜0時を回つてている。明日も
朝一で講義がある。なんちやつて大学生ではあるが、単位もやばい
しちゃんと講義には参加しなくては。早々に電気を消してベッドに
潜り込む。もう少し読了後の何とも言えない余韻に浸つていたかつ

たが、やむを得ない。

「夢の中でのいいから、雁夜おじさんが幸せになるストーリーが見てみたいぜ……」

そう呟くと、のび太くんぱりに即睡眠の才能を持つ俺が深い眠りに落ちていった。遠くなつていく聴覚に、「言い出しつペの法則というものがあつてだな?」という冷厳な男の声が届いた気がした。

目が、醒める。

気づけば俺はなぜか床に突っ立っていた。視界が狭い。まるで鎧の底でも覗いてるかのようだ。あ、いや違う。ホントになんか鎧着てるぞ。しかも全身に。不思議と重くない、っていうかめっちゃ身体に馴染んでる気がする。

視線だけで辺りを見渡せば、なんだかとても身体に良くない空気が充満した密室の中心にいることはわかつた。なーんかつい最近似たような部屋の描写を読んだことがあるような?

「や、やつた……！成功した……！」

声の源は俺の足元から発せられた。音の発生源を正確に察知できた自分に驚きつつ下に目を向けると、そこにはぐつたりと床に倒れ伏しながらも達成感に笑みを浮かべる男がいた。全身余すところなく血だけで、その様子は死人そのもの。顔面も半分はゾンビみたいに枯れている。何を隠そう、間桐雁夜その人であった。そして彼が俺を見上げながら「成功した」と言つてることから察するに、俺はどうやらバーサーカーになっているらしい。全身に着込んだ鎧と身体中に滾る力 魔力？ がその証左だ。夢で雁夜おじさ

んが幸せになればいいとは思つたが、自分でその手助けをする夢を見る羽田になるとは思わなんだ。

(待てよ、ここに雁夜おじさんがこもっていとま、)

雁夜おじさんの背後を見れば、暗闇に溶けこむようにしてキモい爺さんが一ソマリとしたキモイ顔をしてキモい腐臭をまき散らしていた。出たな諸悪の根源め。言峰綺礼はたしかに悪として歪んでいるがどこか愛着が持てる。特に嫌いではない。ギルガメッシュもゲートオブバビロンとかかっこいいし、厨一心をくすぐられるので純粋悪には思えない。だが間桐臓硯、テメーは駄目だ。てめーは俺を怒らせた！

(油断している今こそ好機！雁夜おじさんのトゥルーホンダのためにも死ねやオラマーー！)

夢なら夢で、俺は自分がやりたいようにするだけだ。つまり、雁夜おじさんの願いを叶えてやるのだ！

背中から魔力を噴出し、一拳動で臓硯の眼前まで接近。握り合わせた拳を振り上げ、バーサーカーのスキルである筋力強化を最大限に生かして思い切り叩き落す。ぎゅあん、と空気をねじり切る爆音の尾を引き、拳は隕石のように臓硯の脳天にクリーンヒットした。

「ハハハやあああああーー！」

芋虫のような蟲どもが飛び散るが、それらも全て粉碎する。一片だって残してはやらん。絶対に許さんぞ虫けらどもー！じわじわとなぶり殺しじるか一瞬で消滅させてやるー

俺の気合の一撃によつて臓硯は跡形もなく死んだ。夢のくせにアリティがあるじゃねえか。ちょっと吐きそつだ。うえつー

(ふう、これで一件落ちや…… わお~しまつたやりすぎたか)

すこし加減を間違えたらしく、先の一撃で地下室が崩壊寸前だ。こりやいかん。さつさと雁夜おじさんと同じく地下室に閉じ込められているだらう桜ちゃんを救出せねば。

とりあえず雁夜おじさんが落ちてくる瓦礫の下敷きにならないように回収しておく。耳元で「バーサーカー！？」と困惑の声が聴こえるが、気にしない。というか、どうも上手く喋れないようだ。わざからあーとかうーとかいつた小さな呻き声しか出せない。どうやらバーサーカーになってるせいで俺の思考が狂つたりしないまでも、言葉を発することはできないらしい。夢のくせにリアルだな。まあ無くとも大丈夫だらう。最悪、筆記で意思疎通も出来る。

(桜ちゃんはこの辺かな？お、なんか当たりっぽいな)

適当に田の前の壁をぶつ壊してみると、ビチビチと震える蟲が滝のように流れだしてきた。この中にいそつな感じだ。早く救出してあげないと氣の毒だ。

「バーサーカー、そこだーそこ这儿ー

視界の隅で雁夜おじさんが一点を指さす。さすがおじさんだぜ。おじさんの差した場所をクレーンゲームみたいにそっと掬うと、何かを掴んだ感触がした。ひどく冷たいが、人間の子ぢもっぽい。案の定、それは桜ちゃんだつた。レイプ田になつてボーッとしているが懸命に肩を上下させて息をしている。無事のようだ。ホッと安堵していると、雁夜おじさんがぶつぶつと何か囁きだした。

「ば、バーサーカー。頼む、桜を、どうか、生かして、くれ」

言われなくともそのつもりだ。こんな陰気臭い地下室とはスタコラ
サツサだぜい！バーサーカーはクールに去るぜ！！

「おぐ」

あつ？ちょっとした発言なら何とか出来るのか。これは嬉しい発見だ。意思疎通がしやすくなるぜ！臓硯も死んだし、桜ちゃんも助けだした。後は間桐家当主の間桐 鶴野が問題だが、こいつはワカメの父親だけあつてヘタレだ。どうとでもなるだろう。臓硯が死んだと知つたら嬉々として泣いて喜ぶかもしけん。そうなれば雁夜おじさんとも仲直りで、桜ちゃんも普通の暮らしができるようになるかも。

氣絶した二人を抱きながら、俺は今後の二人の明るい未来について考えを膨らませ始めていた。

あれ？桜ちゃん助かつたんなら俺もう必要なくね？

±雁夜おじさんサイド±

「う、ぐ、」

顔に当たった日光に急かされて泥のような眠りから覚醒すると、そこは自分の寝室だった。日光を浴びたのは久しぶりだつた。臓硯が死んだせいなのか、体内の蟲は今までの慣れっぷりなど嘘のように静まつており、悪くて痺れる程度に収まつている。その痺れが脳を刺激し、昨夜何が起こったのかを想起させる。日光を遮るように手

をかざせば、その手の甲に令呪が宿っているのに気付く。まだ、バーサーカーとは繋がつたままだ。サーヴァントは魔力を常に消費する。口惜しいことだが未熟な俺では蟲の助けがないとそれは不可能のハズ。

「いつたい、何がどうなつて……？」

「雁夜おじさん、大丈夫？」

「ツ！ 桜ちゃん！？」

耳元で発せられた少女の声に飛び起る。そこには、椅子に座つてこちらを心配そうに見下ろす桜の姿があつた。その瞳にも肌にも元の少女然とした健康的な張りが戻つており、蟲に蹂躪されていた過去を感じさせないほど快復している。その様子に、雁屋は今までの地獄のような日々の全てが報われた気がした。否、事実報われただ。雁屋の当初の目的 桜を救い出すことは、ここに果たされたのだ。

(もうこの娘は絶対に不幸な目に合わせない!)

内心に決意し、桜を抱きしめようと身を乗り出し、

コソコソ

「あつ、『J飯が出来たみたい。ちょっと待つてね、雁夜おじさん

腕の間をするりと抜けて桜がノックされた扉へ小走りで駆け寄る。それを少し残念に思いながら、年頃の少女のような仕草を見せてくれる桜の姿に雁夜は優しげなほほ笑みを浮かべた。

(聖杯戦争などクソ食らえだ。令呪もさつさと教会で処理してもら

おう。遠坂時臣に桜ちゃんを間桐に譲つたことを後悔させてやりたいという願いはあるが、それは聖杯を通さなくても出来る。どのみち、すぐに暴走するような強大なバーサーカーを制御できる自信はこれっぽっちもない。きっと戦いの途中で惨めに力尽きてしまうだろう。それより、なるべく桜ちゃんの近くにいて彼女を護つてやりたい）

「ご飯作りご苦労様。今開けるから待つててね、バーサーカー」

「は？」

呆けた声をあげた雁夜の眼前で、桜がよしょとドアノブを捻る。ギイ、と古風な音を立てて開いた扉の向こうから、漆黒の気配がズルリと侵食してくる。雁夜が「ク」と息を呑む中、その気配の持ち主が全体を表す。

全身を黒いフルプレートアーマーで覆った優に190を超える長
駆の男 雁夜が昨夜召喚し、目にも留まらぬ速度での臓硯を
この世から消し去つたサーザン、バーナー。

その威容と迫力は何者が見ても怯えすくむほどのものだったが、雁夜は別の意味で身体を強張らせて硬直していた。

エプロンを着て
当然だ。なぜなら眼前のバーサーカーは
おかゆの載つたお盆を持っているのだから。

理解を越えた光景に、雁夜はただあんぐりと口を開けて固まるしかなかつた。

「雁夜おじさん、おかゆ冷めちゃうよ?せつかくバーーサーカーが作つてくれたのに」

「グルルルル(肯定)」

「なにそれこわい」

○・○ シリアスプレイヤーに、俺はなるー（後書き）

小説家になろうでも何か書いてみたかったんです。思いつきの作品だけど、けつこうスラスラとアイディアが浮かんでくるので続けてみようと思います。Fate/zeroの小説は持っていますが読んだのは2年前です。アニメを見ながら思い出しつつ、ボンヤリとしたところは小説をまた読み直しながらちょこちょこと書いていきます。

1・1 未来の巨乳キャラを作るんだー（前書き）

一発ネタを連載作にするーとの大変さを書きながら思い知る。

1・1 未来の巨乳キャラを守るんだ！

†雁夜おじさんサイド†

レンゲで掬つたおかゆをこちらに向けて「あーんして」とばかりに迫るバーサーカーからもぎ取つたおかゆをひたすら口にかつ込む。塩加減が絶妙でなかなか美味しいのが腹が立つ。米の旨みを存分に引き出す質素かつ贅沢な味わいは日本人の味覚にクリーンヒットする。見た目は西洋騎士のはずなのにおかゆを作れるというのは理解に苦しむ。聖杯からの情報にはそんなことも含まれているのだろうか？ とりあえず精力をつけなければと頬を膨らませてもしゃもしゃと朝食を咀嚼する雁夜の前では、桜がバーサーカーに肩車されてキャッキヤと喜んでいた。未だ全快には程遠いが、笑顔を見せるだけの余裕が生まれたのは良いことだ。バーサーカーの方も乗り気のようで、暴れ馬のように装いながらもまるでお姫様を扱うように丁重に相手をしている。「ぐるる」とか「う~う~」とかしか声らしい声を發しないが、どうやら子どもの相手を出来るくらいの理性は残っているらしい。

(「こつ、本当にバーサーカーなのか？」)

少なくとも雁夜にはそれは見えなかつた。肌を突き刺すプレッシャーも狂戦士そのものだが、言動はその正反対だ。面倒見のいい近所のお兄さんと言えばちょうどいいだろうか。召喚した直後に暴走した際はマスターの制御すら受け付けない凶悪なサー・ヴァントを引いてしまつたのかと不安になつたが、もしかしたら臓窓をマスターである俺の敵と瞬時に理解して排除したのかもしない。マスターに負担をかけないために魔力消費を最小限にセーブしているらしいバ

－サー カー の背中を眺め、雁夜は空になつたお椀を枕元に置いた。バーサー カー のセーブと食欲が満たされたおかげで、死人のような干からびた肌に若干の張りが戻る。

(理性のあるバーサー カー 、か。狂化でパラメーターが向上しつつも思考能力がほとんど低下していないなんて、どういう理屈なんだ?)

冷静に考えれば、これは反則とも言える事例だ。バーサー カー クラスの有利な特性だけつまみ食いしてデメリットはほとんど無視なんて他のマスターが聞けば怒り狂うだろう。サーヴァントシステムを開発した臓硯ならば何かしらの検討がついたかもしれないが、今となつてはそれも叶わない。叶えたいとも思わない。雁夜にとつては己のサーヴァントが意外に従順そうだとわかつただけで十分だつた。

(バーサー カー の制御に問題はなさそうだ。残る問題は、兄さん
現・間桐家当主、間桐鶴夜の存在か)

奴は臓硯の傀儡のような男だ。臓硯の指示通りに動き、立ち向かうどころか意見することも出来ない操り人形。臓硯亡き今も、その意思を継いで桜を時代の間桐家のための贊にしようと画策するかも知れない。急造の魔術師である俺と違つて鶴夜は長年修練を積んだ生粋の魔術師だ。正面きつて戦つても勝ち目はない。だが今の俺には強力なコマがある。

(一応、説得はしてみよう。奴も臓硯の被害者ではある。だが聞き入れなければ、最悪、バーサー カー を使つて奴を……)

「ぐるるつ」

「ん？な、なんだバーサーカー？……」この手紙を読めっていうのか？」

実の兄の殺害も視野に入れだした俺の肩をぽんと叩いたバーサーカーが一通の手紙を手渡してきた。その手は心配するなと言つよう親指がぐつと立てられている。この英靈の馴れ馴れしさというか見た目とのギャップというか英靈らしかぬ日常じみた所作には、雁夜はもう驚かなくなつた。

手紙の差出人は鶴夜だつた。

『なんかスゲー怖いお前のサー・ヴァントがめっちゃ睨んでくるし、ジジイもくたばつたらしいし、もう俺もゴールしていいよね？といふわけで俺は生まれて初めての自由を満喫しに自分探しの旅に出るので絶対に探さないで下さい。絶対だぞ？絶対だからな？』

P・S 桜をよろしくへへ』

「あんのクソ兄貴！」

ふざけた手紙をグシャグシャに丸めて部屋角のゴミ箱にシュウウツツッ！超！エキサイティン！！

まだ満足に動かせない腕のせいで目標を逸れて床に落ちた手紙をゴミ箱に入れ直すバー・サー・カーを尻目に、盛大な肩透かしを食らつた雁夜はがっくりと頭を抱える。

色々と言いたいこともあつたが、すでにいない人間に言つても仕方がない。元より、先に間桐家から逃げ出したのは雁夜の方なのだから、鶴夜を強く責める資格が自分にないことも重々承知していた。大きくため息を付いて思考を切り替えると、「さて、これからどうするか」と雁夜は独りごちた。桜の救出という目的は果たしたし、以下の障害と思つた兄もとんずらこいた。遠坂時臣に桜にした仕打ちを思い知らせてやるうと心中で渦巻いていた執念も、無事な桜を

見ていると小さくなつてゆく。残す問題は　自らのサーヴァントと聖杯戦争だ。正直に言つて、今の自分に聖杯に叶えてもういうな大それた願いなどない。そうなると、バーサーカーはお荷物以外の何者でもない。魔力を食いつぶす上に敵襲の危険も誘う厄介者だ。

はしゃぎ過ぎて疲れたのか足取りのおぼつかなくなつた桜を優しく支えるバーサーカーにちらりと流し目を送る。雁夜が眠っている間に桜は自分の命の恩人であるバーサーカーにすっかり懐いてしまつていた。

（悪い奴ではなさそうだし、心苦しきはあるが、自害でもさせて消えてもらつた方が　　）

「ううう…」

「ハハハハハハハハ！」？

「つー？ 桜ちゃん！？」

突然、その場に倒れ伏した桜とそれに慌てふためくバーサーカーに悪寒を感じて駆け寄る。

抱き上げれば、桜の顔色は蒼白になり、全身から玉のような汗が吹き出していた。唇が急激に乾き、肌から潤いが見る間に抜け落ちてゆく。まるで雁夜が今の状態になるまでを早送りで見ているかのようだ。

「！」　これは……！」

思いつく理由は一つだけ　　臓硯の蟲による強引な施術の影響だ。臓硯という頭脳を失つた蟲どもが暴走し始めている。サーヴァント制御を目的として植えつけられた雁夜の蟲と違い、桜のそれは臓硯が理想とする次代の間桐を生む母体育成を目的としている。臓硯の

「ノトロールを離れた蟲どもは目的を見失い、桜の体内で暴れまわっているのだ。

「臓硯め……死んでもなお桜ちゃんを苦しめるのか…」

荒い息を吐く桜を自身のベッドに寝かせながら、雁夜は憤怒に燃えた。

バーサーカーがどんなに魔力消費をセーブしても、すでに蟲によつてボロボロに食いつくされた雁夜の身体は一年も持たない。後悔はない。そういうことを承知した上で臓硯に取引を持ちかけたのだ。しかし、桜は違う。

(「この娘には、真っ当な人生を歩ませてやりたい）

刻々と息を荒ぐする桜の頬を撫でる。ザラリとした粗い肌触りに膣を噛む。

間桐家の魔術を知る臓硯も当主もいない今、あるかどうかわからぬ治療法を捜している猶予はない。あと数日の間に、蝕まれた桜を癒さなければならない。それほどの奇跡を起こせるものが必要だ。一度目を閉じて覚悟を決めると、雁夜は背後に向き直る。そこには従者然として雁夜の後ろに控え立つ騎士　　バーサーカーがいた。禍々しく燃える赤い瞳を力を込めて真っ直ぐに見つめる。

「バーサーカー、聖杯に願うことが出来た」

バーサーカーは黙して雁夜の口から命令が下されるのを待つ。まるで言わなくとも雁夜の意思が通じているかのように。雁夜は爛々とギラつく赤い双眸の奥に同じヒトの心の温かさを感じた。

「桜を救う。そのために、俺はこの命を使い果す。協力してくれ、

バーサーカー

幼い少女のために命をかける。清らかで強い願いを掲げた雁夜の顔には、今までにない熱い信念と誇りが確かに芽生えていた。その願いに、黒鉄の騎士は片膝を突いて応える。左胸に叩きつけた右拳がガシャンと力強い音を立てる。主君への忠誠を示す返礼だった。

ここに、桜の命を救うために聖杯を目指す者たち
バーサーカー陣営が誕生した。

間桐雁夜／

‡バーサーカーサイド‡

雁夜おじさんを助けるのが目的だつたんだがなあ。今はどつにかこうにかして魔力消費を抑えてるからキツくないだろうけど、俺が本気で戦うことになつたらおじさんの寿命「ゴリ」ゴリ削っちゃうんだぜ？血反吐吐いて地べたでジタバタ痙攣だぜ？……まあ、本人が望むのならいいか。凄くさっぱりした顔してるし。それにこのまま桜ちゃんが死んじゃつたら雁夜おじさんの今までの決死の努力も水の泡だしな。俺としても、例え夢であつたとしても小さな女の子が苦しんで死んでいくことを見過こしたくない。この夢から覚めたら最悪に目覚めが悪いことになる。

しゃーない！ここは一つ、騎士っぽくカッコつけた返礼をして、おじさんと一緒に戦うことになりますか！

1・1 未来の巨乳キャラを作るんだ！（後書き）

次話はまだアイディア段階です。この駄文を読んでくれる殊勝な方がいましたら、どうか気長に待ってください。^_^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7068y/>

せっかくバーサーカーに憑依したんだから雁夜おじさん助けちゃおうぜ！

2011年11月21日10時53分発行